会議終了後提出

資料 10

第 4 回世界社会科学フォーラム
World Social Science Forum 2018
開催結果報告

1　開催概要

(1) 会　議　名　：　（和文）第 4 回世界社会科学フォーラム
　　（英文）World Social Science Forum 2018
(2) 報　告　者　：　第 4 回世界社会科学フォーラム国内組織委員会委員長　宮本　一夫
(3) 主　　催　：　国際学術会議（International Science Council）
　　国立大学法人九州大学、日本学術会議
(4) 開 催 期 間　：　平成 30 年 9 月 25 日（火）～ 9 月 28 日（金）
(5) 開 催 場 所　：　福岡国際会議場（福岡県福岡市）
(6) 参 加 状 況　：　７８ヵ国/地域・１０２３人（国外４１５人、国内６０８人）

2　会議結果概要

(1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯：

『世界社会科学フォーラム』は、国際社会学会、国際心理科学連合、国際経済学会、世界政治学会、国際地理学連合、国際人類民族科学連合等、世界の社会科学系の学術団体 60 を束ねる国際社会科学評議会（International Social Science Council: ISSC*）が三年に一度開催する会議であり、社会科学系の国際学会世界大会としては最大規模のものである。2009 年の第 1 回から当会議で 4 回目を迎えた。ISSC*は、社会科学関係の分野別、国別、地域別の諸種の学術団体を代表して分野を横断し議論を深める場を提供する責務を担い、当会議はその責務を果たす重要な役割とされる。具体的には、報告者を学者に限定せず、国際機関職員、政策担当者及び NGO 職員などあらゆるステイクホルダーが学際的な議論を展開させ未来社会を構想するもので、それゆえ会議名称を Conference や Symposium でなく Forum としている。

日本学術会議は 2014 年より ISSC*に加盟しており、世界社会科学フォーラムがアジア未開催ということもあり日本開催について ISSC*より熱心な働きかけを受けていた。尚、ISSC*は、本年度 7 月に国際科学会議（International Council for Science: ICSU）と合併し、文系・理系の分野の共同体として世界の学術界を束ねる世界最大の学術団体、国際学術会議（International Science Council: ISC）が結成された。

旧 ISSC と ICSU が共同主導してきた国際研究プログラム Future Earth への日本学術会議の積極的な取り組みに対する両団体からの評価や、日本学術会議のなかでの社会科学の国際化への期待等を背景として、前回会議開催の 2015 年 9 月以降日本開催待望の気運が高まった。旧 ISSC 理事会より日本開催に係る交渉開始希望の正式通知を受け、同年 11 月に日本学術会議第一部部会国際協力分科会内の準備委員会が移行する形で「WSSF 国内組織委員会」が発足し運営準備と交渉が開始された。2016 年 10 月オスロでの旧 ISSC・ICSU 合同総会にて日本開催が正式決議された。

(2) 会議開催の意義・成果：

世界が直面している喫緊の課題に焦点を当て、分析し、アジアの玄関口である福岡の地より最新の研究報告、議論、提言を発信するという目標を果たせた。学問的意義としては、社

会科学の役割の一つである、“複雑な現代社会の実態を捉え、社会の未来像を描き、行動提案を行う”という要素を実践し、社会科学の活用意義の再構成と更なる発展につなげることができた。

(3) 当会議における主な議題（テーマ）：

Security and Equality for Sustainable Futures「持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等」をメインテーマとして、Security については持続的なシステムによる食、エネルギー、高齢者や弱者の生活の安全保障や防災を、Equality については人々の多様性を維持した共存や移民・避難民問題に必要な相互理解の問題等について議論した。また、地球温暖化、開発などによる環境破壊の防止・環境保全から、AI 活用の現状と可能性にも及ぶ多角的なサブテーマを掘り下げた。国連の採択課題『持続可能な開発のための 2030 アジェンダ』に係る報告についても数セッションを設けた。

(4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

海外の約８０の国・地域から４１５名、及び国内から６０８名の参加者を迎えた。

共催機関の科学技術振興機構（JST）に加え、早稲田大学、一橋大学、La Trobe 大学、総合地球環境学研究所、東京大学社会科学研究所、京都大学東南アジア地域研究研究所、日本大学、アジア開発銀行研究所より、運営サポート組織、WSSF コンソーシアムに参画を得られ、これらの各機関主宰による、高い研究力と豊富なデータ、強固な国際研究ネットワークを立証する学術セッションを構成でき、防災、高齢社会、被爆、アジア太平洋地域の現状と課題等々を取り上げ“アジアからの国際発信“という今回の会議の意義を深めることができた。

また、ISC が束ねる社会科学系の六大国際学会に対応する日本の各学会より後援を得、うち５学会が各々招待セッションを主宰した。日本学術会議と九州大学は全体セッションの各一つを主導し、国際的プレゼンスを発揮すると共に世界の学術界の進展に寄与することができた。

(5) 次回会議への動き：

『世界科学社会科学フォーラム』は、旧 ISSC が母体となって行われてきた国際会議であったため、今後、ISC が母体として継続して『世界社会科学フォーラム』を行うか、あるいは別の形での国際会議に発展解消するかは、今後 ISC 内部で検討される。したがって現在のところ次回開催は未定である。

(6) 当会議開催中の模様：

会議初日に開催された開会式には皇太子同妃両殿下のご臨席及び皇太子殿下よりのお言葉を賜った。松山内閣府特命大臣（当時）、小川福岡県知事、髙島福岡市長より各挨拶を受け、国際学術会議ダヤ・レディ会長、日本学術会議山極会長、フォーラム国内組織委員会宮本委員長、九州大学久保総長、国際学術会議エリサ・ライス副会長より歓迎の辞が述べられた。

会議は、開会式に先駆けオープニング・全体セッション *Existential Risks* で幕を開けた。前・ロンドン大学 LSE 学部長、現・アリゾナ州立大学教授のクレイグ・カルホーン氏を座長に迎え、ベストセラー経済書の執筆者としても知られるオックスフォード大学環境変動研究所所属 Kate Raworth 氏、和平と紛争解決の分野の権威、元・メキシコ環境開発相のウルシュラ・オズワルド・スプリング氏、前・仙台市長で東日本大震災後の地域復興に重責を果たした奥山恵美子氏が登壇し、先見的な議論を展開した。

２日目午前の全体セッションでは、近年の研究・進化によりその安全性について多角的な議論の必要性が高まりを見せている“AI”と人類の共進化についての最新報告と提起が、科学技術振興機構主導の下行われた。また、社会科学者と自然科学者の連携の模索が話し合

われた。

9 月 26 日夜の全体セッションでは、持続可能な社会に向けての“包括的豊かさ指標：Inclusive Wealth”の提案者の一人で、国連プロジェクト報告書の歴代執筆者、福祉経済学と環境経済学の世界的第一人者、ケンブリッジ大学教授パーサ・ダスグプタ氏、前・米国商務省経済分析局チーフエコノミスト、バーバラ・フラウメニ氏らを基調講演者に迎え、指標の意味と価値が詳しく論じられた。

3 日目全体セッションでは“ASEAN の役割と地域のリーダーシップ”に焦点を当て、また、最終日午前の全体講演では昨今の武力衝突や種々の兵器開発と取引、科学研究の誤用の実相という現代世界の深刻な課題に迫った。

初日開会式後の歓迎レセプションには 500 名を超える参加者があり、また会期 3 日目 27 日の夜には親睦会としてバンケットが開催され、WSSF 学生優秀アブストラクト賞の授与式も執り行われた。鏡開き、九州大学邦楽部による雅楽演奏など日本の伝統文化の要素もバンケットの盛会に彩りを加えた。

最終日の閉会全体セッションでは、司会の ISC ダヤ・レディ会長が、会期 4 日間で行われた 100 に及ぶ大小さまざまなセッションの総括として、「持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等」というテーマで、Future Earth 諮問委員長、前 ISSC 会長、東京大学白波瀬佐和子教授の 3 名のパネリストと共に報告と提言を行った。

(7) その他特筆すべき事項：

会議母体である国際学術会議（ISC）は、国際社会科学評議会（ISSC）ならびに国際科学会議（ICSU）が合併して 2018 年 7 月に結成されたばかりであり、『第 4 回世界社会科学フォーラム』は国際学術会議の第 1 回目の国際会議となった。

会議母体の ISC は若手研究者の養成を精力的に行っており過去のフォーラムと同様に当会議でも「発展途上国若手社会科学者支援プログラム」を設けた。ISC・国内組織委員会各々がプログラム基金への募金活動を展開し、274 件の応募より採択された投稿者への参加登録料、旅費支給・ビザ取得支援を行い、結果、当プログラムより 37 名の参加者による研究報告の招へいが実現した。

3 市民公開講座結果概要

(1) 開催日時：平成 30 年 9 月 29 日（土）

(2) 開催場所：九州大学伊都キャンパス（福岡市西区元岡）

(3) 主なテーマ、サブテーマ：

テーマ：Security and Equality for Sustainable Futures
（持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等）

サブテーマ：持続可能な成長に向けた国連・各国・企業の取り組み

(4) 参加者数、参加者の構成：126 名、一般、学生・教職員　入場無料　同時通訳

(5) 開催の意義:フォーラム史上 4 回目にしてアジア初開催が実現した世界社会科学フォーラムの主催機関の一つとして、大会での発表、成果を本学に持ち帰り、閉幕翌日に地元市民の皆様への総括として報告、共有ができたことは大変意義深い。

九州大学馬奈木俊介主幹教授が代表を務める『2018 年国連・新国富指標』(UN-Inclusive Wealth Report 2018)の試みなど，世界各国で進められている GDP を超えた新しい国富の計測のあり方や，ワークライフバランスと労働生産性の関係など，持続可能な成長に向けた取り組みについての紹介がなされ、研究分野の垣根を超えた学際的な講演となった。

また、持続的な開発や世代間の平等の分野での先駆的研究者、パーサ・ダスグプタ氏（ケンブリッジ大学名誉教授）など、一般単独行事では招へいが難しいと思われる、世界的権威と影響力のある登壇者を招くことが可能となり、大学生、大学院生、教員等への高い教育的効果がもたらされた。

(6) 社会に対する還元効果とその成果：

準備においては福岡市をはじめ複数の自治体やメディアと協力し、幅広い告知を行った。

開催においては、一般参加者の理解を深めてもらうため，司会の馬奈木教授が「新国富指標」の概要に対する説明を講演に先駆けスライドを交えて日本語で行った。開催後のアンケートには『専門用語もあまり使用されず理解しやすかった。』『国際性、多様性に富み、新しい考え方を学ぶことができた。』という意見が多く寄せられた。

4　日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本の人文・社会科学、生命科学、理学・工学のあらゆる学問分野の研究者を代表する機関である日本学術会議との共同主催が実現したことで、人文社会科学系と自然科学系を統合する国際学術会議（ISC）の結成後の最初の世界会議にふさわしいフォーラムとすることができた。特に、社会科学のみならず自然科学を含めた研究者による、超学際的な議論が可能なプラットフォームを形成できたことに、意義がある。また、社会科学系学問の実用的価値の確認・再構成という点も、皇太子同妃殿下より開会式へのご臨席を賜り、ご理解を表すお言葉を寄せて頂いたことにより、国内外に更に大きく発信することができた。

一方、日本学術会議の予算により会場費（学術プログラム使用室料）の大部分と、海外招へいの講演者の旅費、滞在費の一部の支出が可能となり、プログラムの充実化が図れた。